九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

挫折から実りへ

稲垣, 良典
九州大学 : 名誉教授

https://doi.org/10.15017/1564239

出版情報：哲学論文集. 50, pp.181-184, 2014-12-26. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

挫折から実りへ

稲垣良典

編集幹事から依頼されたのは九州大学哲学会の初期の歴史について回顧録を書くことであるが、私が九州大学に着任した昭和四十七年は学会発足からすでに八年後であり、学会創設に到る経緯や草創期の出来事などは断片的に伺ったことがあるに過ぎない。また学会の運営、学会誌の編集などに関しても、当時は哲学科に二人の助手がおり、色々と一緒に仕事をすることの多かった倫理学科にも助手がいて万事取りしきってくれたので、私の仕事は文学部から出る出版補助金を確保することだけであった。私が最初に『哲学論文集』に寄稿したのは着任の翌年に発行された第九号で、教官が一人順番で書くことになっているという話だったので、その頃は編集方針もかなり定まっていたようである。

九州大学哲学会は、東京大学の「哲学会」と同じく、その設立の趣旨から言っていわば内輪の学会だったと思う。東京大学で或る機会にたしか山本信先生から伺ったところによると、学部あるいは大学院を終えて研究職のポストを得た卒業生たちのなかには、在学中のように厳しい試練にさらされることがなくなったせいか、御座成りの研究ですませている者が見うけられる。そのような卒業生たちにいわば活をいれて研究意欲を新たに起こさせ、業績をあげてもらうため、内輪の学会を造ることになった、ということ

であった。したがって「内輪」ということは、決して親睦をはかり、楽しくやろうということではなく、内輪だからこそ思いきって厳しい言葉のやり取りもできるし、問題を煮つめることができることに配慮したものであった。

「哲学会」の場合、そのような配慮がどの程度成果を挙げたのか私には判断できないが、一般的に言って私が経験した限りでは、これと似た「研究者を同輩が厳しく批判する」(peer criticism) 機能を適当に発揮する学会はわが国にはあまりないのではないか（聞いたところでは新約学会ではそれが盛に行われるそうであるが）。私は大学院学生として、また研究員、客員教授として米国のいくつかの大学や研究所に籍を置いたことがあるので、哲学関係の学会の実状については或る程度承知しているつもりであった。しかし、米国の大学で、学界に登場したばかりの多くの場合「若い」研究者を招いて行う「コロキウム」の内状を、親しくなった同僚から知らされた時は、少なからず驚いた記憶がある。或る大学の哲学科が新進の研究者を招いてコロキウムを行うことを決めると、その大学の若い研究者たちは、手分けして招待された報告者がそれまでに公刊した論文を徹底的に分析し、弱点や誤謬と思われる点を洗い出す。その上でコロキウムの席上で報告者を論駁し、窮地に追い込もうと試みるのである。言うまでもなく、報告者は自分が置かれている状況については百も承知であるから、そうした攻撃や批判を退け、あるいは躱そうとする。このようなコロキウムは研究者にとって必ず経験しなければならない関門ないし通過儀礼であり、それを突破することで実質的に学会の一員になれるのだ、という話であった。

peer criticism の機能を発揮する学会は日本にはあまりないのではないか、と言ったが、私自身、九州大学に着任した直後に、それと多少似た経験をしたことがある。たしか着任した年の秋、西日本哲学会で発表するように要請されたのだが、条件として、トマス・アクイナスについての発表であると、興味を持つ者がごく限られてしまうので、できれば近世哲学からテーマを選ぶこと、というのがあった。私はその頃「習慣」の古典的概念の再評価に関心を集中させていて、例えばD・ヒュームが習慣の概念を導入して、それまで思考や存在の第一原理の一つと見なされてきた因果性の原理は単なる習慣の所産にすぎないことを明ら

かにした、という哲学史の解説は誤りではないか、むしろヒュームは心の習慣のちからで因果性というものが理解可能 intelligible になることを示そうとしたのではないか、と考えていたので、そのような解釈を試論として提示した。この報告はかなり活発な論議を呼び、滝沢克己先生や宮内久光氏が熱心に質問してくださったのが記憶に残っている。

この話をここで持ち出した理由は、後で二、三人の人から、西日本哲学会で九州大学に新たに着任した者に報告を依頼するのは「お手並み拝見」という意味があると聞いて、自分が試験を受けていたことに気付いたからである。どのように採点されたかは知らないが、後年、オックスフォード大学のベリオル・カレッジで旧知のA・ケニーにこの話をしたところ、ヒュームの思考はもっと複雑だと反論され、自分でも古典的な習慣概念を不用意にヒュームに適用したと反省している。研究者が、或る程度気心の知れたメンバーの集りである内輪の学会と、「家風」を異にすることでお互いに良い意味でライバル意識が働くようなメンバーから成るより大きな学会との両方で、厳しい批判に曝されるのは大変歓迎すべきことなので、九州大学哲学会と西日本哲学会が将来もそれぞれの特徴を保ちながら成長してゆくことを願っている。

話を文学部着任の頃にもどすと、私が痛切に経験したのは挫折とまでは言えないが、かなりの困難をともなう研究状況であった。当初、南山大学でたまたま文学部長を押しつけられ、できるだけ早く研究に専念できるポストに移りたいと考えていた私に九州大学文学部から提示されたのは哲学・哲学史第三講座で近世哲学史を講じておられ、近く停年を迎えられる山本清幸教授の下で中世哲学史を担当する助教授のポストであった。研究に専念できるなら助教授への降格は何ら問題ではなかったし、第一講座に哲学を講ずる畏友の黒田亘氏がおり、第二講座にプラトン研究で劃期的に新しい道を切り拓いた（東京大学で古代哲学史を講じておられた斎藤忍随氏は文字通り興奮してこのことを私共に紹介された）松永雄二助教授がいるのであれば、これ以上の望ましい研究環境はあるまいと思ったのである。ところが突然、黒田君が東大に移ることになり、私は空席に

なった第一講座の教授として哲学を講じなければならないことになった。

さらに文学部の建物に足を踏み入れてみると、大学紛争はとっくに終っていると考えていたのに、なぜか研究棟はかなり薄よごれた感じで、とくに倫理学研究室のあたりはひどく荒れはてていた。しかも私は着任早々、紛争の煽りで教授、助教授、助手がすべて不在であった倫理学講座の担当教授を命じられ、この後、有能な助手寺園喜基氏の助けをかりて倫理学研究室の大掃除を断行したところ、占據学生たちの反撥と怒りを買い、研究棟の自室に数時間「監禁」されることになった次第である。

このように文学部構内がおよそ研究に適した雰囲気ではなかったので、私の心は静穏と憩いを求めて「山の頂き」に向い、ごく頻繁に大学院生の諸君をかたらって近隣の九重や背振、それに好んで笹栗の若杉山から太宰府の豊満山へ続く峯歩きにでかけた。研究室の黒板にこの山歩きを「哲岳の道」と冷笑かした文字が記してあるのを見たことがあるが、山歩きに賛同してくれた新島龍美君が「論文書くのも体力です。山登りしましょう」と書き添えてくれたのも記憶に残っている。

山歩きとは別に、九州各地にある国立大学の施設を利用して二泊三日程度の研究合宿を比較的数多く行ったのも、当時の文学部構内のかなり劣悪な研究環境が一因であった。これらの研究合宿は私が発案し、計画を進めたのではなく、大学院や学部の学生諸君の発意によるものが多く、私は学生諸君の胸をかりて修業するつもりで参加したようなものである。とくに昭和五十五年、島原の国立大学宿泊施設で行われた私の習慣論を主題とする研究合宿は、おそらく長年私の講義を聴いていて、仲々研究が進展しないのに業を煮やした卒業生や在学生諸君が、問題を整理して見通しをよくしてやろうという親切心から計画してくれたもので、今でも心から有難く思い、このような哲学の共同研究の雰囲気が生まれたことを大きな喜びとしている。

（九州大学名誉教授）